
夜桜お蝶～艶劇乱舞

秋月あきら

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夜桜お蝶〜艶劇乱舞

【コード】

N0081E

【作者名】

秋月あきら

【あらすじ】

魅せます、殺ります、咲かせます。華やかな桜柄の振袖を、着こなすお蝶は三味線に、想いを込めて唄います。謎の黒子は人形使い、お蝶の美声に乗せまして、巧みな業をお魅せします。悪の蔓延る処なし。今宵も華を咲かせましょう。

偽りの春（序章）

代官所にまつわる黒い噂は、女郎仲間の間では周知の事柄だった。あそこに行つて帰つてこない者がいる。

ただし『あそこ』が代官所だという断定はできない。

元締めは、逃げた、急死した、借金を返し終えたから村に返したなど、それらしい理由を話す。代官所や代官という語句はまったくでない。

では、なぜ女郎仲間の中で代官所の噂が立つのか？

その晩、お千佳はどこに行くとも聞かされず、強引に連れてこられた場所が代官屋敷だった。

これまで幾度か料亭に呼ばれ、代官の相手をしたことがあった。

しかし、この場所に呼ばれたのは初めてだ。

消えた女郎たちは皆、代官に目を掛けられていた者ばかりであった。お千佳も同じ道を辿っていると気付き、怯える日々を過ごしていたところに、この場所になにも聞かされず連れてこられたのだ。

廊下を歩くお千佳は首元がむず痒くなって、指先で軽く押さえた。その場所には小さな痣がある。代官の吸うような接吻で付いた痕だ。前を歩いていた紺色に着物が足を止め、面長な顔を振り向かせ切れ長の目でお千佳を睨んだ。

「奥の部屋でお代官様がお待ちだよ、粗相のないようにね」

元締めの言葉には逆らえない。

故郷で暮らしている母と妹の幸せな顔が浮かぶ。きっと故郷に残してきた二人は幸せに暮らしている。そう思えばこそだ。

襖の奥は静かだった。今日は代官ひとりしかないのだろうか？ ひとつ息を飲んでから、襖をゆっくりと開けた。

座敷ではすでに代官が酒を嗜んでいた。

干からびた枯れ木みたいな、とても痩せこけた顔がお千佳を見た。「近う寄れ、晩酌を頼む」

声まで枯れたしわがれ声だ。

歳も相当と聞くが、それでも痩せた代官は、毎晩のように酒を浴びるように飲み、若い女を貪るように抱く。あの枯れた躰のどこにそんな体力と性欲が潜んでいるのか？

お千佳が代官の横に座ると、枝先みたいな指が腰を這った。

構わずお千佳は杯に酒を注ごうとしていると、突然に代官が覆いかぶさってきた。

「お代官様！」

思わずお千佳は声をあげた。

いつもと雰囲気が違う。

ぎらつく代官の眼は狂気を湛え、黄色い歯を剥き出しにして笑っている。

恐ろしくなったお千代は着物を乱して逃げた。だが、足首を掴まれ、襖を倒しながら大きく転倒してしまった。

真つ暗な奥座敷には布団が一式敷いてあった。

代官の指がお千佳の太腿と這う。

「お代官様、おやめください」

「よいではないか、よいではないか！」

代官は嫌がるお千代の足を掴んで引きずり、ふとんの上に乱暴に投げ飛ばすと、野獣のように襲い掛かった。

「イヤアアアアアアッ！」

絶叫の木霊を廊下で聞いたお紺は、真つ赤な紅を歪ませ艶やかに嗤った。

偽りの春（一章）

山道を歩いていると急な夕立が降ってきた。

近道だと通ってきた道だが、斜面が急で足元が悪く雨でぬかるみはじめている。

柿渋色の大きな葛籠を背負っていては余計に歩きづらだろう。

遠めに目を見やると、小さな山小屋が見えた。獵師が骨休みをするための小屋だろう。寝泊りくらいならできそうだ。

芸者か花魁か、桜模様の華やかな着物を着た女は小屋の扉を開けた。

「失礼しますよ」

誰もいないと思って言った挨拶だが、どうやら中には先客がいたようだ。

男と女がひとりずつ。微妙な距離を保って座っている。どちらも獵師には見えない。

見るからに尖っていていそうな男は案の定、小屋に入ってきた女に向かって睨みを効かせた。だが、次に入ってきた者を見て、ぎよっと眼を剥いた。

「なんだてめえら？」

答えたのは華やかな着物を着た女だった。

「失礼いたしやす、あたしや旅芸人のお蝶と申します。こちらにおりますのが、連れの黒子」

黒子の姿はまさに舞台裏方の黒子。頭巾を被った黒い顔で、軽い会釈をした。旅姿としては相応しくなく、空の下で出会えば皆一様に驚く姿だ。

お蝶は早々に腰を下ろすと、黒子も背負っていた葛籠を床に下ろして正座をした。

方膝を立てて座っている男は、あからさまに嫌そうな顔をしてお蝶と黒子を見ている。

お蝶はにつこり笑って受け流す。

男は舌打ちをして床を睨んだ。その近くには女が似たような眼をして床を見ている。

この男女の関係は恋仲には見えない。

男の風貌から察するに、やくざもんの使い走りだろうか。少なくとも真つ当な生き方をしている者の眼ではない。

女のほうは難しい。綺麗な晴れ着と化粧をしている。お蝶と比べれば不思議はないが、山中には不釣合いだ。

化粧で誤魔化されているが、よく見れば女は若い。まだまだ娘という言葉が相応しいかもしれない。

子細がありそうな男女だ。

小屋の屋根を叩く雨音は強くなっている。もう外には出られそうにない。日も暮れはじめ、今夜はここで一晩明かすことになりそうだ。

しかし、一晩明かすには険悪だ。

元凶は不貞腐れている男。お蝶と黒子に不快感があるようだ。特に黒子を見る眼は鋭い。

黒子は正座をして無言でじつとしている。その姿は不気味という形容詞が当てはまりそうだ。得体の知れない者に警戒感を抱くのは当然といえよう。

長い時間が無言で流れた。

遠くの山から雷鳴が響いてくる。

雫の音が小屋の中でした。続いて男の舌打ちが聴こえる。

「チツ、雨漏りしてんじゃねえか……」

眼を凝らすと男の着物の袖に染みができている。

天井を見れば雫がぼつりぼつりと垂れている。険悪な雰囲気は拍車をかける出来事だ。

お蝶が自分の横に置いていた包みをすっと手に取った。

「退屈じゃありませんかい？」

男が顎をしゃくつてお蝶を見ると、彼女は話を続ける。

「これでも旅芸人の端くれ、退屈しのぎに芸を見てくださいます。もちろん御代はいただきません、退屈しのぎの座興でございます」お蝶が包みを開いて出したのは、三本弦をぴんと張った楽器。見た目からも明らかかな三味線だった。

不審の念を抱く男の目の前で、黒子が葛籠を開けようとしていた。「おいてめえ、なに出そうとしてんだ！」身を乗り出す男。

すぐにお蝶が割って入った。

「これから見せます芸に使うもんですよ」

黒子が葛籠から取り出したのは、煌びやかな羽織りを着た糸あやつり人形だった。人形の大きさは、だいたい黒子の膝丈くらいだろうか。

人形が出てきて、はじめて晴れ着の女が口を開いた。

「おもしろそうね」

やはり若い。化粧で艶やかに繕っていても、声は瑞々しく幼さが残っている。

相手の興味を惹けばあとは簡単。

しかし、男は未だに警戒感を解いていない。

「そんなの頼んじやいねえ、さつさと仕舞いな」

「そうといわず、そちらの娘さんは見たいと顔に書いてありやす」

と、お蝶は言っただけで娘の顔を覗きこんだ。

「見たい、わたしは見たい」

願いを乞う瞳で娘は男を見つめたが、男はそれを簡単に突っぱねた。

「てめえにや自由なんてねえんだ。おれが見たくねえと言っただら、それでおしまいよ」

「わたしは売られていくんだ。これくらい良いじゃないか……御代もいらないうちでいるんだ」

売られていく娘に上等な着物を着せて送り出す。それが晴れ着と化粧の理由だった。

もうすでにお蝶はイチヨウ型の撥を構えている。黒子の準備も整っているようだ。

男は不貞腐れた顔で、床にどすんと胡坐をかいた。するとほじまるお蝶の演奏。

澄んだ声で唄い出すお蝶に合わせて、黒子の操る人形が舞い踊る。時には激しく、時には穏やかに、人形は小人と見紛うほどに滑らかな動きを魅せている。

先ほどまで険のあった男の表情も、きよとんと人形に魅入られてしまっていた。

夜も更るまで、お蝶は声枯れることなくその美声を響かせた。それに合わせて黒子も一人で二体の人形を操る妙技を魅せた。見ている二人も時を忘れて、時おり思い出したように瞬きを連続でしていた。

険悪だった雰囲気もどこ吹く風で、芸が終えた後は皆に健やかな眠りが訪れた。

翌朝になると雨は止んでいた。

眠気眼を擦りながら男は狐に抓「ツマ」まれた気分だった。

過ぎ去った雨と共に、謎の旅芸人たちも姿を消していたのだ。

小屋の外にでた娘を色鮮やかな紅葉が出迎えた。

秋の景色は哀愁を誘「イザナ」い、娘は潤んだ瞳で泣いていた。

それは売られていくことの哀しさか、それとも別の想いなのだろうか……。

知るは娘の心だけ。

偽りの春（二章）

町中でも二人の姿は行き交う人の目を惹いていた。

旅芸人のお蝶と黒子である。

華のあるお蝶を見る目は皆熱く、全身真っ黒な黒子を見る目はさまじまだ。

柿渋色の葛籠を背負い、黒子は杖を突きながら歩いている。杖の突き方は地面を確かめるようで、前が見えていないような歩き方だった。

道の真ん中を歩くお蝶と黒子の向かいから、派手な着物を乱す娘が走ってくる。

だいぶふらつく足取りで、娘はぶつかるようにしてお蝶に抱きかかえられた。

すぐさま娘を追ってきた面構えの悪いやくざもんたち。

「あら、困ったねえ」

と、お蝶は小さく呟いた。

抱きかかえられた娘はすでに気を失っている。やくざもんたちはすぐそこまで迫っていた。

「おい、その娘を渡してもらおうか！」

ドスを利かせた低い声に、周りの町人たちは身を潜めたが、言われたお蝶は凜としている。

「渡すもなにも、あたいたちは通りすがりの旅芸人。この娘さんとはなんの関係もありやせん」

「ならさっさと渡しやがれ！」

「ですが、通りがかりとはいえ、あたいに助けを求めた娘を放っておくわけにもいきやせん」

娘と三味線を黒子に預けようとお蝶は振り返り、向けた背に血の気の多いやくざが飛び掛ってきた。

黒子の持っていた杖が飛ぶ。

杖はやくざの眉間に当たり、短い奇声をあげてどんと倒れた。やくざもんたちが一斉に匕首を抜いた。

対するお蝶は素手である。

ひらりひらりとお蝶は踊り、風を切る刃先を躲す。

ぼんとお蝶が相手の手首を叩けば、握られていた匕首は吸いつけられるように地面に落ちる。

舞い踊るお蝶の姿はまるで黒子の操る糸人形のようにであった。

いつの間にかやくざもんたちは地面に倒され、残る一人は乱心して匕首を振り回して襲ってくる。けれど、そんな相手も軽くあしらい、力も加えたようすもないに、ひょいと投げ飛ばしてしまった。

くるりと回って飛んだ男は腰から地面に落ち、呻き声をあげながら戦意を喪失させた。

「お、覚えてやがれ！」

と、お決まりの文句を吐き捨てながら、情けない背中を見せて逃げていくやくざもんたち。

辺りは急に静まり返ってしまっていた。

しかし、空気は緊迫した人々の視線が痛いほどに飛び交っている。

お蝶が物陰に隠れている町人に顔を向けると、町人は怯えた唇を開きはじめた。

「おまえさんたち、天狐組に手を出すなんて生きてこの町を出られないよ」

「この島のやくざはそんなに幅を利かせてるのかい？」

「天狐組とお代官様が……」

なにかを言いかけて口を噤んだ。それでも察しは容易につく。天

狐組とお代官様の間に、なんらかの関わりがあるということだろう。

黒子に抱かれている娘は安らかな顔をして目を閉じている。その首筋には痣らしき青い痕があった。

そして、娘は死んでいた。

痣以外は外傷もなく、こんな痣が致命傷とも思えず、娘はおそらく病かなにかで死んだのだろう。

お蝶は辺りの人々に言葉を投げかける。

「死んだこの娘さんの身寄りを知ってる者はいないのかね？」

皆一様に首を横に振った。中に一人がこう言う。

「その子は女郎だよ、どつかの村から連れて来られたんだらうよ。」

この町に身寄りなんていないさ」

引き取り手がないのなら仕方ない。

黒子は柿渋色の葛籠を開けると、中にその娘を丁重に入れた。人々はその光景に目を丸くした。

大きな葛籠と言っても、中に荷が入っているだろうし、娘が入らないこともないが、躰を曲げなければ到底入らない。それが、娘の躰はすーっと葛籠の中に吸い込まれたのだ。

天神の術か、それともバテレンの術か、得体の知れない黒子の謎は深まるばかりだった。

娘の入った葛籠をひょいと持ち上げ、黒子は重さなど感じさせない足取りで歩く。

お蝶も自分の三味線の包みを持って歩きだす。

二人が向かった方向は、やくざもんたちが逃げ去った方向だった。道行く人にお蝶は天狐組の居所を訊いて回った。すると賭場を構成していると教えられた。

天の紋が入った戸の前に目つきの悪い男が立っている。その男はお蝶の姿を見た瞬間、腰が引けた。

「て、ててめえは！」

つい先ほど、お蝶にのされた男だ。

戸の前から動けない男を軽く押し退け、戸口に手を掛けた。

開いた戸の音は甲高く奥の部屋まで響いた。

中に居た者は一斉に身構える。

険悪な男たちとは違い、お蝶は柔和な笑みを浮かべた。

「あたしや喧嘩に来たんじゃありません。親分さんにお目通りを願いたく参上いたしやした」

奥の部屋から煙管を吹かせた小太りの男が現れた。

「俺になんの用だいお譲ちゃん」

「こちらさんの子分が追っていた娘さん、可哀想に亡くなりやした」
「で、亡骸は？」

「はい、そちらの葛籠に……」

お蝶が手向けた先で黒子は葛籠を開けた。

葛籠の中から『立って入っていた』ように娘の亡骸は脇を抱きかかえられた。

畳に寝かされた娘の表情は安らかだが、頬は酷くやつれてしまっている。

「随分とここの親分さんは遊女の扱いが手厚いようである……」

と、皮肉って、周りの眼がきつくなつたのを承知でお蝶は言葉を続ける。

「この娘さんがなぜ死んだのか、深い詮索はいたいやせん。ですが、せめて里親に知らせてやるのが筋つてものでしょう」

お蝶の足元に小判が一枚投げられた。放つたのは親分だ。

「娘の亡骸は俺たちが預かる。それは娘を届けてくれた駄賃だ、取っておきな」

「一両とは羽振が良いこつて、ありがたく頂いておきやす」

一両には運び賃の他に、口止め料や無駄な詮索をするなどという意味が含まれているのだろう。

懐に一両を仕舞ったお蝶は軽く頭を下げた。

「それではあたいはこれで失礼いたしやす」

背を向けたお蝶を見ながら、親分は子分たちに顎をしゃくって合図をした。

子分が抜いた切っ先がお蝶の背を襲う。

誰かが呟く。

「懲りないお人たちで……」

まるで背中に見があるように、お蝶はじ首をひらりと躲し、相手の手首を捻り上げた。

「いででで……」

呻く男の横でお蝶は艶笑を浮かべた。

女の細腕でお蝶は掴んでいた男を、戸を破って通りの向こうまで投げ飛ばした。

驚いて眼を剥いた親分にお蝶は再び軽く頭を下げた。

「失礼したしやす」

着物の襟首を正しお蝶はこの場を後にしようとした。

その背中に親分が声をかける。

「おい、ちよつと待ちな」

「なんですかい？」

振り返ったお蝶の瞳に映る親分は人が代わったように、手をすり合わせて偽善者顔を作っていた。

「その腕を買おうじゃないか、ウチの用心棒としてどうだい？」

「ご生憎様で、あたいらは旅芸人。喧嘩沙汰を商売にしておりますやせん」

二階から降りてくる人の気配がした。

子分の誰かが声をあげる。

「姐さん！」

紺色の着物を着た艶やかな女が、裾から生足を覗かせながら降りてくる。姉御のお紺だ。

「ウチの若いのを可愛がってくれたそうだね。それだけの武芸の腕がありや、他の芸も達人だろうよ。あたしが座敷を紹介してやろうじゃないか」

「ありがとうございます」

礼を述べるお蝶を見ながら、親分は口を挟む。

「おいおい、おまえ……」

「あんた、なにか文句でもあるのかい？」

と、切れ長な眼のお紺に睨まれ、親分は怯えたように口を慎んだ。壊れた戸口を不審そうに見ながら、若い娘を連れた男が玄關に上がってきた。男の方はお蝶にすぐ気がついたようだ。

「あんたは……」

男と娘は山小屋で出会った二人だった。

連れの娘は畳に寝かされている、同じ年頃の娘の死体を見つめている。これから足を踏み込む世界の成れ果てだ。

お蝶と黒子はすでに通りに出ていた。屋内にいる親分と姉御に頭を下げて立ち去った。

乱暴に運ばれていく娘の死体。それを見る娘の眼は憎悪を湛えていた。

偽りの春（三章）

「あんたが新しい子だね？」

色香の薫るお紺の瞳で見つめられ、娘は躰を竦ませた、すぐにきつい眼でお紺の瞳を見た。

「お千代と申します」

「どこかで見た顔だねえ？」

切れ長の眼をさらに細くしてお紺はお千代の顔を見つめた。親分も同じようにお千代を見つめたが、すぐに首を横に振った。

「知らん。うちは入れ替わりが激しいからな、似たような顔もいたかもしれん」

「そうかねえ」

お紺は首を傾げながら、なにか納得のいかない顔をしていた。

「まあいいさ、付いておいで」

お紺は流し目でお千代を見て、そそくさと履物を履いて外に出て行ってしまった。

慌ててお千代は道に出たが、すでにお紺の姿はなかった。

「なにしてんだい、こつちだよ」

声が出た方向を振り向くと、壁と壁の間の細い道を歩くお紺の後姿があった。

細い道を抜けると急に大きな庭に出て、お紺は縁側に手をついて部屋の中を覗いた。

「弥吉、弥吉！」

家の中に響くお紺の声。

返事はすぐに返ってきた。

「へい、今すぐ！」

部屋の奥からお千代と同じ年頃の若い男が顔を出した。

男はお千代の顔を見て、すぐに眼を伏せた。お千代も男の顔を見たが、なにも言わず鋼のような顔をしている。

お紺はお千代に向かつて顎をしゃくつた。

「新しい子だよ、いろいろと教えておやり」

「姐さん……部屋がどこもいっばいで」

「それなら死んだ菊花の部屋に」

死んだ娘の代わりにお千代に部屋を使えと言うかと思いきや、まったく違つた。

「小枝を移動させて、空いたふとん部屋にその子を入れておやり」
「へい」

軽く頭を下げた弥吉を見ることなく、用事が済んだお紺は姿を消してしまつた。

弥吉は目で付いて来いとお千代に合図した。

連れて行かれたのは、やはりふとん部屋だつた。

弥吉はお紺を先に部屋へ通すと、ぴしゃりと戸を閉めた。

二人つきりの小さな部屋で、突然弥吉はお千代の両肩を掴んだ。

「おれだよお千代、わかるかおれのこと？」

「ひと目見たときから気付いてたよ」

はしゃぐ弥吉とは対照的に、お千代は不機嫌そうに視線を伏せていた。

畳んで積み重なつていたふとんの上にお千代は腰掛けた。

「村を捨ててやくざになつてたなんて……あんたはもうわたしの知つてる弥吉じゃない」

五年ほど前に村を飛び出した弥吉。お千代と弥吉は幼馴染であつた。

弥吉は肩を落として壁にもたれ掛かつた。

「仕方ねえだろ、百姓の倅で脳もねえ。そんなおれがまっとうな仕事に就けるわけがねえだろ」

「だつたら村に帰ってくればよかつたのに……」

「一度飛び出した家に帰れるかよ。親父には勘当だつて言われたんだしよ」

沈黙が降りた。

再開は必ずしも活気付く華やかなものではなく、長い時は人を変えてしまった。

俯いていた弥吉が顔を上げた。

「おい、おれがここを出してやるから逃げろよ」

お千代が返事を返すまでに時間があつた。

「足抜けしろつていうの？ そんなことしないよ、するもんか」

「だってよ、ここの元締め、さっきのお紺姐さんは、人を自分と同じ人とは思ってねえぜ。無理をさせられて何人が過労死したことが、それに……」

「それに？」

「なんでもねえよ」

「ここの女郎屋、悪い噂があるんでしょ？」

「おれはなんにも知らね」

急に心を閉ざして、部屋を出て行こうとした弥吉。その腕をお千代が掴んだ。

「本当は知ってるんでしょ」

弥吉は顔を前に向けたままお千代を見ようとしない。

お千代は強引に弥吉の腕を引っ張り、向かい合って目と目を合わせた。

「わたしの目をちゃんと見て、嘘つかないで！」

「おれはうそなんて……」

「わたしの姉さんのこと、なにか知ってるなら教えて頂戴」

「……知らない……知らないって言ってるだろ！」

弥吉は腕を振り払い、お千代の躰を突き飛ばした。

床に崩れるように尻を付いたお千代の目には、必死に堪える涙が揺れていた。

「わたしは姉さんのことが知りたくて、自分でここに来ると決めたんだ！」

心の叫びをぶつけられた弥吉は拳を握って震えていた。

「おれだって……おれだって……。あいつは突然消えちまったんだ」

「やっぱりなにか知ってるのね！」

「あいつはある日突然、この女郎屋から姿を消しちまったんだ。元締めに聞いたら足抜けしたって言われた。親分に聞いたら、おれは知らないからお紺に聞けって言われた」

それは約一年ほど前のこと、姿を消した女郎の中にお千佳いう名の女郎がいた。それがお千代の姉だった。

睨むような慈しむような、なんともいえない表情で弥吉はお千代を見据えた。

「おまえは早くここを出て行けよ」

「嫌だ」

「お千佳はおれが探す。お前までいなくなつて欲しくねえ」

「嫌だ、わたしは覚悟を決めてここに来たんだ」

「ならお代官様には近づくなよ」

「お代官様になにかあるのかい？」

「いや……別に……」

弥吉は嘘のつけない正直者だった。

「代官がなにか関係あるんでしょ！」

「……みんなお代官様がなにか知ってるって噂してる。けどよ、相手はお代官様だぜ、どここうできる相手じゃねえんだ」

「意気地なし！」

「そういう問題じゃねえだろ、畜生ツ。いいか、お代官様には近づくなよ。あとお紺姐さんにも気を付けろ、勘が馬鹿にいいんだ。無理すんなよ、あばよ」

早口でまくし立てた弥吉は、お千代になにか言われる前に部屋を出て行った。

部屋に残されたお千代は辺りを見回した。

一見してただのふとん部屋だ。

しかし、もしかしたら姉がこの部屋を使っていたことがあったかもしれない。そんな淡い気持ちもお千代の心にはあった。

そして、自分に味方がいたことが、なによりも嬉しかった。

偽りの春（四章）

石灯笼が灯つているとはいえ、庭は暗がりて隅々まで見通せなかった。その闇に身を乗り出して目を凝らすお蝶。

「桜の下には屍体が埋まっているとよく言ったもんございやす」

廊下からお座敷に戻って、正座をしたお蝶はボンと手を叩いた。

「こりゃ失礼、それをいうなら柳の下でござえやした」

女郎屋の元締め　お紺の紹介でお蝶たちは座敷に呼ばれた。

相手は代官のお付だ。当の代官は隣の座敷で宴会を催しているらしい。お付の侍は酔わない程度に酒を嗜み、大事とあればすぐに駆けつけるように待機している。

この侍たちに芸を認められれば、代官に推挙してもらい、後日お代官のお座敷に呼んでもらえるということだ。

黒子はまだ葛籠から人形を出さずに、じつと正座をして待機している。

お蝶は三味線の音を合わせながら侍に尋ねる。

「お武家様方は、身の毛もよだつような怖い話はお好きでござえやすか？」

「それは良い、お代官様は奇譚がお好きでござったな？」

一人の侍はそう言い、隣の侍と顔を見合わせた。

「そうだ、あの御方は恐ろしい話が好きだと言っておられた」

お蝶はそれを聞いて、艶やかに笑って頷いた。

「それはよろしいこつて。外の桜の木を見ておりやして、ひとつ面白い話を思い出しやした。今は秋、桜の花も咲いておりやせんが、今からお話するのは怪談とは無縁と思えやす、麗らかな春の話でございやす」

そして、お蝶は唄い出した。

黒子は唄に合わせた人形をすでに取り出していた。まるで示し合わせたような手際の良さだ。

女郎に本気の恋をした男と、その男を愛してしまった女郎の悲恋の話。

饒舌に唄う声に合わせて、弦が切れんばかりの激しい三味線の音色。

料亭の外は激しい雨が降ってきた。

風が笛を鳴らし、稲光が障子に女の影絵を映し、雷鳴が轟いた。

その時にちょうど、渡り廊下を歩いていたのはお紺に連れられたお千代であった。

お千代はお蝶が唄う部屋の前を通り過ぎ、隣の部屋の前で足を止めた。

廊下に二人は正座して、お紺が障子を開けた。

「失礼いたします」

開けられた障子の先では、代官が胡坐をかいて仰け反りながら酒を浴び、その取り巻きでは美人の芸者たちが歌い踊っていた。

ギロリとした代官の目玉がお千代を見た。

「早う早う、近う寄れ」

自分の横に座ったお千代に代官は空のお猪口を突き出した。すぐにお千代は酒を注いだ。

酒を注ぐお千代の横顔を舐めるように代官が見ている。

「上玉じゃのう」

生臭い息がお千代の吹きかかった。

代官はもう周りの芸者など見ていない。

「もう下がってよいぞ、二人で酒を楽しむでな」

唄い踊っていた芸者たちが急に静まり、乱れた着物を直して廊下に出て行く。最後にお紺がお座敷を後にする。

「どうぞごゆるりと……」

恐ろしいほどの艶笑を浮かべて、お紺は障子をぴしゃりと閉めた。「若くて良い躰をしておる」

裾の間から枯れ枝のような指が差し込まれ、柔肌の太腿をまさぐられた。

顔を背けたお千代の横顔に代官の顔を近づく。

「怖がることはないぞ、儂は女の扱いを心得ておる」

ねっとりとしたモノがお千代の頬を這った。それは蛞蝓「ナメクジ」のように動く代官の舌であった。

お千代の躰は震えた。いや、痙攣した。

身の毛のよだつ恐怖のほずが、気持ちとは裏腹にお千代の躰は身悶えた。

耳を舐められ、息を切らしたお千代は退いた。

代官から逃げるようにお千代は退いた。

しかし、代官は蛇のようにしつこくお千代の躰に巻きつこうとする。

「儂が怖いか？」

「……………」

お千代の顔は引きつっている。

「良い表情じゃ。恐怖に引きつった顔のなんと甘美なことか……………」

「嫌……………まだ心の準備が……………」

「大人しく儂に抱かれろ」

「嫌……………緊張して……………か、厠に行つて参ります」

お千代はめいっぱいの力で代官の躰を押し退け、廊下に続く障子の前に逃げた。

「厠に行つて参ります。す、すぐに帰つて来ます、絶対に」

「逃がさんぞ！」

飛び掛つてくる代官に背を向けてお千代は廊下に逃げた。

廊下を走るお千代は本当に厠に駆け込んだ。

肩で息をしながら、表情は強張っている。

呼吸を整えたお千代は裾を捲き上げて、自らの股座に手を忍ばせた。

そして。

「ぐっ……………」

歯を食いしばったお千代の目頭から涙が零れた。

厠を後にしたお千代は廊下ではったりお蝶と出会った。

お蝶は無言で横を通り過ぎようとしたお千代の腕を掴んで引き止めた。

「どこか怪我でもしたのかい？」

お蝶の掴んだお千代の手首から先に、血で汚れた跡が残っていた。

「いえ……」

「ならいいけど」

お蝶は懐から出した手ぬぐいで、お千代の手の穢れを拭った。

軽く頭を下げてお千代はお蝶と別れた。その足で代官のいる座敷に戻る。

障子を開けて、正座をしたお千代は深々と頭を下げた。

「失礼しました。心の準備はもうできました」

顔を上げたお千代の表情は、先ほどと別人のように凜としていた。

「ほう、恐ろしゅうなって逃げたと思うたが、戻ってきたとは見直したぞ」

心の決まっているお千代は、臆することなく代官に身を任せた。

蝋燭の火が消された。

雨音が激しく打ち鳴らされ、部屋まで延びる雷光が代官の顔を照らす。

醜悪な表情で嗤っている。

お千代はその表情を睨に焼き付けながら目を瞑った。

相手の為すがままに、お千代は傀儡と化した。

傀儡に涙は出なかった。

遠い世界に置いてきた耳に代官の声が響く。

「生娘と聞いておったが……ん？」

しかし、代官はお千代の股座から手を離し、指先につけた血を舐めた。

いつ流された血なのか、それを知っているのはお千代のみ。

偽りの春（五章）

長い悪夢から目覚めたお千代は料亭の外にいた。

心を濡らす土砂降りが地面を叩いている。

「お千代！」

名に呼ばれた。

振り向くと傘を差した弥吉がいた。

「どうして弥吉が？」

「お千代がお代官様のお座敷に呼ばれたって聞いたから、お紺姐さんに傘持ってくつて言つてすつ飛んで来たんだ」

「お紺姐さんは？」

「俺が傘を渡したら、後は任せたって帰っちまった」

傘にも入らずお千代はふらふらと歩き出した。

「おい、待てよ」

すぐさま弥吉は自分の傘にお千代をいれた。

お千代は抜け殻のような表情をしている。足取りも危なく、ぬかるんだ地面ではいつ転ぶか見られない。

「大丈夫か？」

「……大丈夫」

言葉とは反対にお千代の意識が薄れ、前のめりになって倒れそうになり、すぐに弥吉が傘を投げて抱きかかえた。

「おい、しっかりしろよ」

抱きかかえたお千代を間近で見た弥吉の表情が曇る。

項垂れたお千代の首筋に残る青い痣。

「畜生ッ」

代官に目を付けられた女が付けられえる印だ。

お千代は疲れた表情で気を失っていた。

弥吉はお千代を背負い、傘を拾い上げた。

幼かったお千代が、いつの間にか大きく成長していた。弥吉はそ

れを背中で感じ、土砂降りの雨の中を歩き出した。

行燈は傘と一緒に投げたときに使い物にならなくなっていた。

暗い夜道が二人を包む。

夜道に消えていく二人の影をお蝶はそっと見守っていた。

偽りの春（六章）

お千代たちの姿が消えたあと、お蝶は黒子を引き連れ歩き出した。傘は差しているが、暗がりの中で行燈は灯していない。

月も星も出ていない晩。土砂降りの雨が空から落ちてくる。時おり奔る稲光が辺りを照らす。

歩いていたお蝶の足がなぜか止まる。

ふと横を見ると、細い路地で蹲る娘の影があった。

派手な振袖がびしょびしょに濡れている。

「どうしたんだい、あんた？」

お蝶が尋ねると娘は震えた躰で逃げ出そうとした。

「ちよいとお待ちよ」

お蝶は相手の袖を掴み、そのまま自分の元に抱き寄せた。

娘の首に青い痣がついていることをお蝶は見逃さなかった。

激しい雨音の中で黒子は耳をそばだてた。

お蝶は黒子に娘を預け、通りに出て遠くに目をやった。

踵で水を跳ね上げ、何者かが束になって走ってくる。その顔には見覚えがあった。天狐組みの奴らだ。

雨で臉を開けづらそうにやくざもんたちは辺りを探している。もちろん、黒子が肩を抱いている娘だ。

やくざの一人が暗闇に潜むお蝶に気付いた。

「おい、年頃の娘を見なかったか？」

「見た」

と、お蝶は顔を横に向けて娘を示した。

娘は引き渡されると顔をハッとさせ、寒さと恐怖で身を震えさせた。

やくざもんが娘に近づこうとしたとき、それを遮るように長い腕が伸びた。

「娘さんをあんたらに渡す気はありやせんよ」

「なんだと？」

眼つきの悪い男は下から顎を突き出し睨め付けた。いつの間にかやくざもんたちはお蝶を取り囲んでいた。彼らにはいつかの礼もあるだろう。たっぷりとお蝶を可愛がるうと思ってるに違いない。

しかし、お蝶に臆する様子はまったくくない。

「娘さんが欲しければ、あたいを犯すなり殺すなりなすってからにしてもらいましょうか」

「おう、言われなくても姦「マワ」してやらあ」

「威勢だけは良いこつて。今日は観客もおりやせんし、都合の良いことに暗がり。こちら本気でやらせてもらいやすよ？」

「調子に乗りやがって、やっちまえ！」

暗がりです鈍くヒ首が光った。

大の男が束になつてお蝶に襲い掛かる。

朱塗りの傘が宙に投げられた。

お蝶が舞う。

それは乱舞だった。

「ゲギョエツ……」

蛙の咽元を潰したような奇声があった。

そして、お蝶から一番離れていた男が地面に倒れた。

その奇怪な現象にやくざもんたちは一瞬怯むも、頭に血の昇った躰は抑えられず、構わずお蝶に飛び掛った。

暗がりの中で風が雑がれた。

風が吹き出すような音がした。それは首を失った胴が血を噴き上げる音だった。

今度こそ心の芯から怯んだ男たちは動きを止めた。

仲間のひとりが首を飛ばされた。その男にお蝶は触れていない。

かまいたちか？

一人の男が叫び声をあげてお蝶に背を向けた。逃げようとしてもしたのだろう。

しかし、その男の末路は悲惨だった。

男の上半身が傾いた。否、右肩から左腰まで何か趨「ハシ」り、男の上半身が斜めにずり落ちた。

地面に落ちた上半身だけの男は、しばらくの間、もがき苦しみ生きていた。その呻き声を聴いたものは、耳に張り付いた恐怖に夜な夜なうなされることだろう。

誰も逃げるしかないと思い、やくざもんたちは各々の方向に走り出した。

膝を斬られ勢い余って胴が飛んだ。

首が転がった。

手が飛んだ。

斬られた四肢が宙を舞う。

噴出す血は雨や泥と混ざり、穢れた沼をつくりだす。

最後に腰を抜かして動けなかった男が残った。

地面に尻をつけ、躰の震えが止まらない。

夢にしても悪すぎる。例え覚めたとしても、瞼の裏に焼きつく残像が恐怖を呼び起こすだろう。

男は叫ぶ。

「殺してくれ！」

死んで楽になったほうがまだ。

昏「クラ」い陰を落とすお蝶の唇が艶やかに微笑んだ。

「外道は殺す価値もないね」

お蝶の手が動いた刹那、男の片耳が削ぎ落とされた。

「ぎゃえ！」

悲鳴をあげた男の股間が温かくなった。男は失禁してしまっていた。

お蝶はそれを知ってか知らずか嘲笑う。

「お逃げ、逃げなきゃもう片方も落とすよ」

「や、やめ……」

男は指で泥を掻き分け必死に立ち上がろうともがいた。

四つん這いになって背を向ける男のケツにお蝶の蹴りが入った。

「さつさとお逃げ、そのまま尻を突き出してる気なら、本当に尻を二つに割るよ」

「ひえっ！」

まともな言葉も出せず、男は必死に立ち上がり走り出した。けれど、少し走ったところで足がもつれて転んでしまった。

顔面から地面に飛び込み、それでも痛みなど忘れて立ち上がり、無我夢中で逃げていった。

残されたお蝶はばら肉に囲まれながら呟く。

「……さて」

黒子は一部始終の間、肩を抱いていた娘の眼を手で押さえていた。例えば目で見えなくとも音は聴こえ、娘は恐怖を感じていた。

凍てついた狂気が辺りを包んでいる。

黒子は娘の躰を半回転させ、目から手をゆっくりと退けた。娘は振り返る気など毛頭ない。振り返ってはいけないと本能的に感じた。

黒子は背負っていた柿渋色の葛籠を地面に下ろした。

そして、ゆっくりと蓋を持ち上げた。

お蝶は遠くを眺め甘く囁く。

「おゆきなさい」

泣き叫ぶような声が聴こえた。

その声は葛籠の奥にある闇の世界からした。

悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも

苦痛に満ちている。

葛籠から闇色をした風が飛び出した。

叫び声をあげながら 闇 が世界を飛び交う。

闇 はお蝶の周りを飛び交い、地面に落ちた血肉を呑み込んでいく。

跡形もなく、血の一滴も残さず、地面を抉ってでも全てを呑み込もうとする。

貪欲に貪り喰う。

何事もなかったように、その場にはなにも残らなかった。

「さっ、自分の世界にお帰り」

お蝶の言葉に服従する 闇 は、やはり叫びながら葛籠の中に飛び込んでいく。

そして、黒子は葛籠の蓋を固く閉じた。

声を聴いてしまった娘は震えていた。

聴いてはいけない、この世ならぬ叫びを聴いてしまった。

これから一生、闇を恐れて生きていかなくてはならないかもしれない。

女郎屋を逃げた娘は、それが正しい選択だったか、胸に迷いを生じさせた。

偽りの春（七章）

自分が泊まっている宿にお蝶は娘を匿った。

ふとんに寝かされた娘の顔は赤く、頬がやつれてしまっている。

豪雨に打たれ風邪を引いてしまったらしい。痩せこけた娘の顔を見るに、自力で回復する体力はなさそうだ。

お蝶は娘の額に濡れ布を被せた。

「よく効く薬がある。それを飲んで、温かい粥でも食って休むといい」

無言の黒子は早々にあの葛籠から薬を出し、娘に口を開かせようとした。

だが、葛籠が再び開けられるのを見た娘は凍り付いてしまっていた。

葛籠が開かれる恐怖が躰を凍らせる。

黒子はお蝶と娘に背を向けて、徐「オモムロ」に顔の前に掛かっている黒い布を捲くった。今、壁だけが黒子の顔を見ている。果たしてどんな顔をしているのだろうか？

壁を向いた黒子は紙に包んだ薬を顔に近づけてなにかをした。

再び顔を隠した黒子は振り返り、娘の顔に自分の顔を近づける。

驚く娘の眼前で、黒子は顔に掛かる布を捲くって、なんと素顔を見せたのだ。

娘は呆として口を開けた。その瞬間、黒子は口移して薬を娘の口に飲み込ませた。

唇を離しながら黒子は再び顔を隠した。

娘は呆としたまま、目を白黒させてしまっている。

この世ならぬモノを見たことは確からしいが、なにを見たのか娘はぼんやりとして思い出せない。

薬が効いたのか、それとも別の妖術か、しばらくして娘の熱は引いてきた。

先ほど粥を食べた娘だが、風邪がどこかに飛んでしまったためか、腹の虫がぐうと鳴いた。

宿の者に大きな握り飯を三つ用意してもらったが、娘は相当に腹を空かせていたのか、あつという間にぺろりと平らげた。

口の端に付いた米粒を親指で取り、娘はその指を舐めた。

それを見ていたお蝶がにこりと笑うと、娘も人懐っこい笑みを浮かべた。

娘はふとんの上で正座をして、丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「よっぽど腹を空かせてたんだね」

笑いながらお蝶は言った。

娘も照れながら笑う。

「はい、このところ飯も咽喉に通りませんでした」

「なぜだい？」

「怖くて、お代官様に抱かれるのが怖くて……」

顔を曇らせ娘は眼を伏せた。

優しい顔をしてお蝶は娘の髪を撫でる。

「安心おし、あたいが守つてやるよ」

その方法は恐怖ではない。けれど、それを操るお蝶と黒子に、なぜか娘は強烈に惹かれていた。魔性に属している二人に魅入られてしまったのだ。

お蝶は娘の頭を胸に抱き、優しく髪を撫で続けた。

娘の耳は激しい鼓動を聴いた。

安らかで、落ち着いているお蝶の鼓動が激しい。それはまるで激しい運動をしたように、脈々と躰の中を巡り巡っている。

娘はお蝶の鼓動の音に不気味さを感じ、ゆっくりと抱かれることをやめて躰を離れた。

菩薩のような穏やかな眼差しをお蝶は娘に向けている。

「なぜお代官様が怖いのか話してくれるかい？」

「……はい」

娘は自分が知る限りの話をお蝶たちに聞かせた。

女郎屋から消える女郎たち。その影に潜む代官の悪い噂。そして、自分の身に起きたこと。

この娘は代官のいる座敷に何度か呼ばれ、数回にわたって代官に抱かれた。その時期、この娘以外にも代官の相手をしていた女郎がおり、その女郎の首には代官に付けられたらしい痣があった。

首に印を付けられた女郎は獲物だと皆噂する。その印を付けられた者に限って姿を消すからだ。中には印が付けられたあとに足抜けをしようとする女郎が数多くいる。

前に印を付けられた女郎は足抜けをしようとした。けれど、それは成就することはなかった。この町にお蝶が来てはじめて出会った女郎だ。

あの女郎が死んだ日のうちに、今お蝶たちの前にいる娘は印を付けられたらしい。今日、お千代が座敷に呼ばれるよりも前、日がまだ昇っていた頃のことだった。

代官は一日うちに何人の女を抱いているのだろうか？

あの枯れた躰からは信じられないことだ。

印を付けられた娘は逃げた。それからすぐにお蝶たちに助けられたのだ。

そして今に至る。

お蝶は難しい顔をして腕組みをした。

「本当にお代官様が事件に関わりあるっていうのかい？」

「はい、いなくなつた者はみんなお代官様に印を付けられた者でした」

「多くの女郎がいなくなつたっていうのに、あの女元締めさんや天狐組みの親分さんはなにもいわないのかい？」

「元締めはきつとぐるなんです。絶対そうです」

「あの元締めはなにか臭うとは思っていたけどね。まあいい、今日はずつくりとおやすみ、病み上がりの躰に無理をさせちゃあいけないよ」

お蝶は娘をふとんに寝かし、掛け布団を優しく被せてあげた。そのまま相手の瞳を覗き込みながらお蝶は言う。

「町の外まで送ってあげたいけど、あたいらはまだこの町に用があつてね。店の者に金を握らせておけば、多少は匿ってくれるだろうよ。けどね、危なくなったらひとりで逃げ」

「待ってます」

宿を出た途端、天狐組みのやくぎに出会わないとも限らない。

「そうかい、用が済んだら隣村でも町でも、好きなところまで送ってやるよ」

「ありがとうございます」

「あいよ、おやすみ」

「おやすみなさい」

娘は静かに眼を閉じた。闇は訪れなかった。ゆらゆら揺れる蝋燭の火が瞼の裏に映る。

闇の中で娘は眠ることができないだろう。

これからずっと……。

偽りの春（八章）

代官屋敷の奥座敷でお紺は代官にお酌をしていた。

「少し早くはございませんか？」

酒を飲む早さではない。

「腹が空いておるのだ。全ておまえのせいだぞ」

「一人ずつと、お約束したじゃあございせんか……」

「良いではないか。女に逃げられたのはお主の責めじゃ」

「だからと言って今日入った子にまで、目をつけることはないじゃあございせんか？」

「女などいくらでもいるだろう。なにを案じておるのだ、儂を誰だと思っておる？」

その問いに答える代わりにお紺は目を伏せた。目はなにかを言いたげだ。

月に一人という約束だった。

それが今月は、一人目に逃げられた拳句に死なれ、二人目にも逃げられ子分たちに探させている最中だ。代官は二人目がいるにも関わらず、堪え性がなくお千代にも目を付けた。お千代に印を付けたのは、二人目が逃げたという話が入る前だ。

代官という地位があれば、政「マツリゴト」の範囲内ではいくらでも隠し事が利くだろう。

しかし、悪い噂が立てば立つほど女郎たちは言うことを聞かなくなる。

それにもうひとつお紺は危惧していた。

「逃げた娘を探しに出した子分から連絡がございません」

「逃げた娘がまだ見つからただけだろう」

「それだけなら宜しいんですが、お代官様もくれぐれもご注意を……」

お紺はゆらりと艶やかに立ち上がり軽い会釈をした。

「それでは御機嫌なすつて」

奥座敷をあとにして、障子を閉めたお紺は呟く。

「……糞爺め」

その呟きは完全に雨音に掻き消された。

代官屋敷を出たお紺は御付きを従え歩き出した。

雨風が強く、御付きが持つ行燈が激しく左右に揺れている。

灯していた行燈が雨に濡れてすーっと消えた。

闇の中でお紺の形相は見る見るうちに歪んでいった。

「どいつもこいつも、腹の立つ奴らばかりだね！」

怒りが最高潮に達したお紺は、その長い爪を前にいた御付きの背に振り下ろしていた。

「ぎゃあああ！」

御付きの背が血を噴いた。

地面に両手をついた御付きにお紺は冷笑を浴びせ、裾を捲し上げて御付きの腹を蹴り上げた。

「ぐがっ……」

胃の内容物を吐露した男にお紺を軽蔑した。

「汚らしい真似すんじゃないよ！」

御付きの後頭部は力強く踏みつけられ、頭を地面に激しく打ち付けられた御付きは絶命した。

「こんな下男を殺しても腹の虫が治まらないよ」

嵐の夜道を歩きながらお紺は気を静めていった。

面を被ったように荒れた気性を隠し、お紺は何食わぬ顔で天狐組みに戻って来た。

すると子分たちは慌てふためいていた。

「姐さん！ 一大事ですぞ、早く奥の部屋に来てください」

子分に連れられ奥の部屋にいくと、片耳に布を当てられた男が呻いていた。傍には親分も付き添っている。

「畜生め、誰にやられたかはつきり言え！」

親分の怒号が子分たちの耳を振るわせた。

部屋に入ってきたお紺は冷静を装って辺りの子分たちを見回した。

「いったいなにがあつたんだい？」

子分たちが黙り込む中、答えたのは親分だった。

「いや、それが……わからねんだ」

「わからないってどういうことだい！」

お紺の米神に血管が浮いた。それを見た子分たちは震え上がり、親分まで腰が引けている。

「だってよお、おまえ。帰ってきてからこの状態で話も聞けねえんだ」

「ウチの組は役立たずばかりだね、おまえさんもだよ」

お紺を上から親分を見下ろした。

町民や子分たちには強い親分も、お紺だけには頭が上がらない。

「役立たずなんて言われてもよ、いちよう子分たちを探しに出したんだぜ」

女郎を探しに出た子分たちの中で、ただひとり帰ってきたのは片耳を失った男だけ。他の子分を探しに、新たに子分たちを探しに出したが、一向に見つかったという連絡はない。

外は嵐だ。それに夜だ。外に出された子分たちも嫌々だろうに。

お紺は親分の顔をぎろりと見た。

「で、どうなつたんだい？」

「なにもない。さっき一度帰ってきた子分に話を聞いたが、前に出た子分たちの足取りをまったく掴めんそうだ」

「嵐の晩に隣村まで女郎一人を追う根性はウチの若いもんにはないだろ？ 真昼間だって途中で戻ってくるさ。じゃあどこに消えたのさ？ 死んでるにしても、大勢が死んでりゃあ、どこかに痕跡が残ってるもんだろ。まさか神隠しにでもあつたというのかい？」

片耳を失った男から察するに、なにか暴力沙汰があつたのは確かだろう。と、お紺は察したが、自分でも言ったように屍体すら出ないことが頭を悩ませる。

まさか葛籠に吸い込まれたなど誰が想像しようか。

片耳を失った男は、それからひと言も発せず、眠ることすらできずに恐怖に震え続けた。

雨の中を走り回った子分たちも、なんの収穫もないまま帰ってきた。

今宵のお紺は嵐よりも激しく荒れ狂いたい気分だった。

「どいつもこいつも……」

しかし、お紺は理性で怒りを沈めた。

敵の正体が知れないうちは下手に動かないほうがいい。

いや、正体には心当たりがあった。

知りたいのは目的だ。目の届くところで自由に泳がせたが、今ひとつ相手の目的がはつきりとしていなかった。

そして、お紺は不気味にほくそえんだ。

偽りの春（九章）

嵐の過ぎ去った翌朝は雲ひとつない快晴で、夏が戻ってきたように朝から気温が高かった。

女郎屋ではまた女郎がひとり消えたと、噂にするまでもなく女郎の間に広まっていた。

足抜けした女郎がいても、探す時と探さない時がある。

天狐組み若い衆が探しに出ている様子を見ると、『本当』に逃げ出したようだ。

いつもよりも張り詰めた空気なのは、まだ帰ってこない者がいるためだろう。唯一帰ってきた片耳の男も、一睡もせず正気を取り戻していない。まだなにが起きたのかわからず仕舞いだった。

女郎の世話役の弥吉はお千代の見張りを命じられていた。これ以上、印をつけられた者に逃げられるわけにはいかない。けれど、お千代に逃げる気などない。

狭いふとん部屋で弥吉はお千代に詰め寄った。

「逃げてくれ！」

「嫌よ、わたしは逃げない」

「どうしてだよ！」

「姉さんを見つけるまで逃げない！」

お千代の決意は固い。弥吉の想いもそれに負けないほどだった。

「お千佳はおれが見つける……おれとお千佳は恋仲だったんだ……」
思わず目と口を丸くするお千代。

弥吉は村を飛び出す前から、幼馴染のお千佳に惚れていた。村を飛び出し、やくざになってからも、度々村にいるお千佳へ想い耽っていた。

そのお千佳と女郎屋で再会した弥吉は、今までの想いが爆発した。お千代のほうも、放り込まれた地獄の中で、弥吉のことを頼りにしているうちに気持ち揺れ動き、成り行きのままに自然と二人は男

女の仲となった。

しかし、二人の仲はご法度。

女郎の世話を任されている弥吉が、売り物に手を出したことが知れば、どんな仕置きが待っているか、お紺の性格を考えるだけで恐ろしい。

そのため二人の恋は密やかに育まれた。

弥吉はやくざから足を洗い、お千佳も足抜けをしようと、そう考えていた矢先だった。

お千佳の首筋に青い痣が付いた。

まるで死刑宣告でもされたようにお千佳は狂い、弥吉も頭を抱えて悩みに悩んだ。

その頃、弥吉はお紺に目を付けられていることに気付いていた。だから迂闊な行動に出れず、二人で逃げる勇気が雲ってしまった。

そして、弥吉がおずおずしている間に、お千佳は姿を消した。

お千佳を失った弥吉は人が変わったように、冷淡な性格で女郎たちに接するようになった。それを見ていたお紺は、弥吉から疑念を徐々に消していった。弥吉にとって長い冬の日々がはじまったのだ。心を閉ざしてしまった弥吉。

その心が再び開かれたのは、あの日だった。そう、お千佳の妹のお千代が女郎屋に売られてきた日。

「おれは……おれは……おれのせいなんだ」

弥吉は拳を震わせ、零れそうになる涙を目を閉じて抑えた。

「おれはお千佳を連れて逃げる勇気がなかった。親分やお紺姐さんが怖かった。お代官様に悪い噂があると知っていても、おれにはなにもできなかつたんだ」

それゆえに弥吉のお千代を助けたいという気持ち強い。

しかし、お千代はその気持ちを振り払った。

「わたしに構わないで、わたしは逃げない、絶対に姉さんを村に連れて帰るんだ」

「おまえがなんと言おうとおれはおまえを連れ出す」

逃がさまいと弥吉はお千代の腕を掴み、強引に部屋の外に連れ出した。

店の表は昼間だというのに客が出入りをしており、裏手は裏手で見張りが立っている。縁側の横にある渡り廊下は天狐組の家に繋がり、縁側のわき道を通ると組の真横に出る。逃げ場はどこにもないように思えた。

だが、弥吉は迷わずに二階に行こうとしていた。逃げるとしたら、あの場所しかないと目を付けていた場所があるのだ。

弥吉に引きずられるお千代は必死の抵抗をした。腕を上下に振りながら、廊下に足を踏ん張る。けれど、声をあげるわけにはいかない。声をあげれば騒ぎが大きくなり、弥吉や自分の身が危ない。

辺りに気を配りながら弥吉は頭を左右に動かした。客の出入りが多い夜だったら、二階に上がる前に誰かと鉢合わせだ。

誰もいないことを確かめ、弥吉は階段を上がろうとした。だが、嫌がる相手に階段を上らせるのは容易ではない。廊下を引きずるようにうまくはいかなかった。

それまで気配などしなかったのに、急に背筋を凍らせるぞつとする気配がした。

「どこに行く気だい？」

弥吉は驚いて階段を見上げ、弥吉から顔を背けて逃げようとしていたお千代も、弥吉の先にいる紺色の着物の裾を見た。

目尻が切れ長に上がったお紺がゆっくりと階段を下りてくる。

「どこに行くのかと、あたしは尋ねてるんだ！」

お紺の激昂に弥吉は躰の芯が震えた。

「へ、へい……」

一階の離れにある厠に行くという嘘は、二階に上がるうとしているので使えない。

「そ、それが……客が二階で……」

待っていると続けたかったが、お紺は鼻の先で嘲笑う。

「その子には客を取らせるなど言っただけだぞねえ？」

弥吉は観念した。

そして、お千代の躰を突き放した。

「逃げろお千代！」

突き放されたお千代は逃げなかった。

その場に正座をしてお紺に深く頭を下げた。

「わたしは逃げも隠れもいたしません」

その言葉に弥吉は落胆した。足から崩れるようにして、力なく階段に座り込んでしまった。

お紺が辺りを見回しながら人を呼ぶ。

「誰か、誰か早く来て頂戴！」

すぐに数人の若い衆が駆けつけてきた。

お紺はまだ頭を下げたままのお千代を見下した。

「その子をふとん部屋に押し込めておきな！」

それから弥吉に目をやる。

「こいつにはどんな仕置きをしようかね？」

舌なめずりをしたお紺の眼は妖しく輝いていた。

偽りの春（十章）

先日のお蝶の唄と黒子の人形劇がいたく気に入らしく、代官の御付きに推挙してもらい、今日は日の高いうちに料亭に呼ばれていた。

秋めいていた今日この頃から急に、夏の暑さがぶり返えたことから、道を行き交う町人たちの中には、額に薄っすらと汗をかいている者もいた。

そんな日差しの中でも、黒子はいつものように真つ黒な装束を着て、重たいであろう荷物を背負って歩いている。

お蝶たちが呼ばれたのは、静かな町外れにある情緒が溢れる料亭だった。その場所でお蝶たちの芸を見たいというのだ。

開かれた玄関を潜り抜け、出迎えた店の主人に連れられ、中庭に面した座敷に連れて行かれた。

「この中でしばらくお待ちください」と、早々に主人は姿を消した。

落ち着いた様子でお蝶と黒子は畳に腰を落ち着かせた。

しかし、黒子は葛籠を背負ったままだ。

お蝶がひと言。

「あたいら、この町で人に怨まれるようなことをしたかねえ？」

そこから中から気配がした。それを承知で畳の腰を落ち着かせる、まさに落ち着きよう。部屋の周りは殺気を殺した野郎どもに囲まれていた。

堰を切ったように襖が蹴破られ、押し寄せる男たちが荒波をつくった。

すぐさまお蝶と黒子は障子を開けて逃げた。

障子ごと敵を押し飛ばし、軽やかな足並みで縁側から庭に降りた。お蝶の桜柄の着物が舞い揺れ、描かれた花弁がゆらりと映る。

庭に出たお蝶たちは、囲い込み漁に掛ったように、逃げ場もない

くらい取り囲まれてしまった。

若い衆を掻き分けて、天狐組の親分が姿を見せた。手に握られているのは珍しい短銃だ。密貿易かなにかで大枚をはたいて手に入れた品だろう。

「お紺の奴がお前さんたちのことを臭うというもんだからな。うちの若い衆が行方知れずになってるんだが、知らねえかい？」

人に物を尋ねるにしては物騒な装いだ。周りを取り囲んでいる人数を見ると、余程お紺に気を付けると言付けられたのだろう。

それだけ二人は警戒されているということだ。

この緊迫するはずの状況で、お蝶は微笑を絶やさなかった。

「親分さんのところの若い衆になにがありやしたか？ あたいらはしがない旅芸人ですよ、こんな大勢に囲まれる道理はござえやせんぜ？」

このお蝶の物腰を見て、親分はお蝶の実力のほどを計った。お紺の勘が騒いだように、やはりお蝶たちは只者ではないと親分は悟った。

しかし、お蝶が行方不明になった若い衆たちをどうこうしたという、一本の線には繋がっていない。まさかこの二人が多勢に無勢をどうにかできる、そこまでの想像をするのは突拍子すぎる。たとえそれが事実であつてもだ。

そのためにまだ親分には貫禄という余裕があつた。

「なににせよ、なにか知ってることには違えなさそうだ。おれが仏の顔をしてるうちに大人しく吐いてもらおうか」

「では、ここでお魅せしましょうかい？」

お蝶はこの世のものとは思えない美貌で艶笑した。仏の笑みではない、それは魔性そのものだった。

親分は怯えた。この感覚は誰かと似ている。そうだ、お紺と似ている。お蝶とお紺はどこか似ているのだ。

じつとりと滲む汗を掻きながら、親分は子分たちが見ている手前、恐怖でおののくわけにはいかなかった。

「な……にを見せてくれるっていうんだ？」

隠そうとしても隠し切れない怯えが言葉に出た。

お蝶はそれに気付いてされに嗾「ケシカ」ける。

「昨晚、親分さんの子分がどうなったのか、ここで再現しましょうかと、言ってるんでやすよ」

生唾を飲み込む音がそこから中からした。

余裕があれば、恐ろしさ半分、興味半分で見たいと思うかもしれないが、ここにいる誰もが見たくないと思った。それがなんであるかわからずとも、見たくないと本能的に危機を感じたのだ。

なにも言わない周りの野郎どもに、お蝶はさらに言う。

「どうです？ 見たくはありやせんか？」

親分は瞬きもせず固まっている。

今日は夏のような季候だというのに、この場は氷結してしまったように冷える。

お蝶はあくまで返事をまった。この時間がとても甘美なものであるように、至極の表情で艶笑している。

息遣いが聴こえてきそうなこの場に、ガタンと葛籠を下ろした音がした。

黒子は葛籠を下ろして、その横に正座をした。いつもで葛籠を開くことができる。

親分の片足が地面を擦りながら引かれた。その足は爪先から酷く震えている。お蝶はもちろん見逃していない。

「このままでは埒が明きませんぜ、親分さん？」

もう親分に言葉を返す力はなかった。

口をパクパク動かし、今にも泡を噴いて気絶しそうだ。

お蝶が一步、親分に詰め寄った。

「もう十分にお前さん恐怖を味わいなすった。まだ恐怖を味わいやすかい？ それとも刹那に殺して欲しいと、あたいに土下座でもしやすかね？」

お蝶はゆっくりと目を閉じた。

それがきつかけで子分たちが逃げ出した。親分も逃げ出したが、それを咎める子分は誰一人いないだろう。逃げるが勝ちというが、まさに今がそれだと子分も親分も思ったに違いない。

勝ち目のない勝負を選ぶ誉れもあるが、犬死となれば話は別だ。

お蝶は親分の背中に不吉な言葉を投げかけた。

「逃げるんですかい？ 逃げられませんぜ？」

囲まれていたのはお蝶たちではなかった。本当に捕らわれ囲まれていたのは、親分たちであった。

それは死の罠だ。

ところてんを押し出すように、男たちが細切れにされた。お蝶も黒子も指一つ動かしていない。男たちは自ら死の罠に飛び込み、鋭利な『網』によって細切れにされたのだ。

目の前で細切れになった肉塊を見て、後続の男は足を止めようとしたが、その後ろから押し寄せる男によって、次々と将棋倒しになってしまった。

細切れになって事切れたものは、まだ幸運だろう。中途半端に切られ、生きながらえた者の苦しみは壮絶だ。

発狂した一人の男がお蝶に襲い掛かった。

お蝶はひらりと躲し、猪突猛進の男はそのまま黒子に飛び込んだ。葛籠の上に座る黒子は動かない。男が自分のところまでたどり着けないと踏んだのだ。

その予想通り、男は途中で腹から地面に落ちた。

それはなぜか？

男の膝はすでに断ち切られ、男は勢いだけで黒子に飛び込んでいたのだ。

悲惨な光景に血の香りが立ち込めた。

生き残った者たちを、お蝶はゆっくりと見回した。

「そろそろご覚悟をお決めになったらどうですかい？」

この場に立っている者の中には親分もいた。震える親分の手には短銃が握られている。

地面に向いていた銃口が、震えながら上に上げられた。

銃口の先でお蝶は堂々と立っていた。撃てと言わんばかりだ。

「アアアアアッ！」

野獣のような雄叫びを上げて親分は引き金を引いた。

銃弾は明後日の方向に飛び、快晴の空に消えていった。

お蝶の表情はずっと変わっていない。魔性の笑みを浮かべている。

「銃なんてものはそうそう当たるもんじゃありませんよ。そんなに

震えていては余計にっつもんです。あたいの業は百発百中ですがね」

刹那、お蝶は腕を振った。

あまりの恐怖に親分は震えすら止めてしまった。

しかし、なにも起こらなかつたかに見えた。ただ、お蝶が腕を振

っただけ。

数秒の時間が流れた。

息を呑んだ親分が急に笑い出した。

「ははははっ、なにが百発百中だ。なにも起こらんじゃないか

ッ!？」

「いえ、あたいは確かに斬りやした」

それを理解した親分は、すでにこの時ずれていた。腰に乗っていた胴が、声を発し、軀を動かしたことによって、ずれた。胴はずでに輪切りにされていたのだ。

血管がずれた胴が急激に動き、悶絶しながら親分の上半身は血に落ちた。まだ意識があるが、放っておけばそのうち事切れるだろう。それまでの間、存分に土を掻き糞るといい。

生き残っていた子分たちは止めを刺されたように、次々と地面に尻を付いていった。けれど、本当の止めはこれからだった。

黒子の手が葛籠の蓋に掛かる。

そして。

偽りの春（十一章）

ふんどし姿で弥吉は天井から吊るされていた。竹棒で打たれ、気を失えば冷水をぶっ掛けられる。その繰り返しが続いていた。

男たちに仕置きをされ、弥吉は死と生の境を彷徨っている。意識は朦朧として、躰が麻痺しはじめている。

この地下部屋に足音を鳴らしながら下りてくる影。

お紺は抑えきれない笑みを浮かべて姿を見せた。

「もうだいぶ痛めつけられたようだね」

弥吉の前に立ったお紺は舐め回すように物色した。

「本番はこれからだよ」

お紺の長い指が頂垂れた弥吉の顎を持ち上げ、人払いをするためにお紺は片腕を横に振った。

「お前たちはお行き、あとはあたしがやるよ」

妖しく輝くお紺の瞳に見られ、仕置きをしていた男たちは早々に逃げた。

二人きりになった部屋で、お紺は積極的に責めた。

弥吉の脚に自らの脚を絡め、竹棒で打たれた赤い傷に指先を這わせた。

小さく痙攣する弥吉の反応を楽しみながら、お紺はさらに責めて攻めた。

長く伸びたお紺の舌が、汗を噴出す弥吉の胸板を這う。雄臭を嗅ぎながら、お紺の指先は次々と弥吉の敏感な部分を攻めていく。

「前からあなたには目をつけてたのさ、いつか喰ってやろうってね」

お紺の前歯が弥吉の乳首を甘噛みする。

「本当はもつと熟してから喰いたかったんだけど……仕様がなないね！」

「ギヤアアッ！」

眼を見開きながら弥吉は口を大きく開けた。

胸板から顔を離れたお紺の口は紅く濡れていた。そして、胸板は乳首ごと皮を喰われていた。

本当に喰われると弥吉は恐怖した。

竹棒で叩かれるよりも恐ろしい。生きたまま喰われるなど、底の知れぬ恐怖と苦痛だ。

「た、助けてくれ！」

弥吉は叫んだ。

恐怖に歪む相手の顔を、さぞ至極であるようにお紺は唾って見ていた。

「できないね」

「お、おお願いだ！」

「あんたはあたしを裏切った、二度も」

「……………」

「ごくりと弥吉の咽仏が上下した。

お紺の指先が弥吉の胸の傷をなぞる。

「ギヤ！」

「一度目は、名前はなんだったかね、あの娘。ほら、あんたが惚れてた娘だよ」

それはお千代の姉であるお千佳だと知れた。お紺は二人の仲に気付いていたのだ。

「あんたがあの娘に惚れてるのを知ってね、わざと代官に売ったのさ」

嗜虐症のお紺は、弥吉を苦しめるためにお千佳を売った。

しかし、弥吉は認めなかった。

「おれはそんな女知らねえ、だから助けてくれ」

「そうだね、あんたはあの娘を忘れたように、献身的にあたしに尽くしてくれた。だから許してやろうかと思ったけど、二度も裏切られるなんてねえ」

「おれが姐さんを裏切るなんて……………」

「あんたが連れ出そうとしてたあの娘。前にあんたが惚れてた女の妹かなにかだろ？」

ぎよつと弥吉は眼を剥いた。お千佳の名前すら覚えていないお紺になぜわかる？

「あんたの惚れてた娘の顔も名前も覚えちゃいないけど、臭いは覚えてね。臭いが同じなんだよ、あの娘」

臭いというのが比喻なのか、弥吉には判断できなかった。お紺に感じる底知れぬ恐怖は、人智を超えたものだ。つまり人間とは思えなかった。

次の物色をするために、お紺は弥吉の爪先から股間に向けて舐めるように見た。

「どこを喰おうかね？」

「や、やめてくれ！ もう嘘はつかねえ、姐さんに魂を売る。だから助けてくれ！」

その言葉は本心だった。

「あたしに魂を売る？」

「売る、売る、だから助けてくれ！」

「醜い人間だねえ」

裏切りだった。お千代への裏切り。そして、愛したはずの女への裏切り。

弥吉は女を裏切った。

鼻水と涙を混ぜながら弥吉は泣きじゃくった。

「助けてくれ、なんでも言うことを聞く……」

「その言葉、嘘偽りはないね？」

暗がりでお紺の瞳が金色に光り、弥吉は震えるように首を縦に振った。

お紺は人の魂を買った。

「助けてやろう」

その見返りは？

「あんたがああ娘を代官の所へ連れてお行き」

裏切りの上塗りと、お紺への忠誠を見せること。

お紺は弥吉の返事など待たない。魂を売ったお紺に弥吉は拒否する権利はない。必ず成し遂げなくてはいけない。

縄を解かれた弥吉は力なく地べたに崩れた。

背を向けて立ち去っていくお紺が振り向いた。

「もし、あたしをまた裏切るようなことがあつたら、地の果て地獄の果てまで追いかけて喰い殺してやるからね」

今が地獄。

弥吉は地獄から、さらに深く墮ちようとしていた。

クツクツと唾う男の声が地下に響いた。

偽りの春（十二章）

今、このふとん部屋にいるのは二人きり。外には見張りがいる。弥吉は声を忍ばせてお千代に話しかけた。

「おれの匕首だ。これを懐に忍ばせて置け」

匕首を渡されたお千代は深く頷いた。

いつもは料亭で娘を抱く代官だが、今日はお千代を自らの屋敷に呼ぶという。これを逃す機はない。全ての真相を探るため、お千代は意を決した。

そして、弥吉がそれに同行する。

しかし、お千代には腑に落ちないことがあった。

「どうして弥吉にわたしを？」

女郎を逃がそうとした男と、その女郎を外に出すはずがない。

「逃がそうとしたお前をおれの手で届けさせて、苦しませようとしてるんだ。お紺姐さんってのはそういう人だよ。でもよ、これを逆手に取ってやるうぜ」

「そうね」

「おれも一緒にお代官様のお屋敷に行けるんだ。お前になにかあったらすぐに助けてやるからな」

「ありがとう」

真相は近い。だからお千代は弥吉の言葉を盲目的に信用した。

代官屋敷までの道のりは、弥吉の他に二人の組の者がついた。お千代と弥吉が不審な行動をしないか見張りだろう。

日は西の空に傾いている。夏のような暑さも、秋の陽気に戻りつつあった。

代官屋敷の前まで来ると、弥吉たち玄関の前で待たされることになった。

何気ないそぶりで弥吉はお千代に耳打ちをする。

「なにかあったらすぐに逃げるんだぞ」

言葉はお千代の胸に届いたが、周りに悟られないように、無表情のまま女中に連れて行かれた。

姉と同じ道を歩くお千代。

廊下を歩くお千佳は首元がむず痒くなつて、指先で軽く押さえた。その場所には小さな痣がある。代官の吸うような接吻で付いた痕だ。とある障子の前まで来ると、女中は足を止めた。

「こちらに……」

促されるままにお千代は障子に手を掛けた。

故郷に残してきた母の顔を浮かぶ。そして、別れたときの姉の顔が浮かんだ。

障子を開けると、代官が一人で酒を嗜んでいた。

「近う寄れ、酌を頼む」

枯れた声が耳の中にへばりつく。

お千代は代官の横には座らず、正面に捉えて正座をした。

「恐れながらお代官様に申し立てが御座います」

「なんじゃ、言うてみい？」

「消えた女郎はどこで御座いますしょう？」

包み隠さない真つ直ぐな質問をした。

「女郎が消えた？」

枯れた躰に惚けた表情は本当に呆けた老人に見える。

しかし、瞼の奥で光る眼は野獣のように鋭い。

お千代は目を逸らさずに立ち向かった。

「ここに痣を付けられた者に限つて姿を消しております」

襟首をずらし、白い首筋についた痣を見せ付けた。

それを見た代官は腹の底から低い嗤いを発した。

「確かに、儂は知つておるぞ……女郎はここじゃ」

代官が指さしたのは自らの腹だった。

なにを意味しているのかお千代は戸惑った。

下卑た顔で代官は乱杭歯を剥いた。

「生き血を吸うてやった」

「なんで……そんな……」

「女の血は美酒じゃ。女の生き血はこの上ない美酒じゃ」

「……許せない」

お千代は懐に忍ばせていた匕首に手を伸ばした。

「この人でなし！」

金切り声をあげてお千代は代官に襲い掛かる。

刹那に取った代官の動きは恐るべきものだった。

枯れた躰からは想像も出来ぬ俊敏さ。

掛台から刀を取り、疾風を靡かせ抜刀した。

鋭い切っ先がお千代の咽喉に突きつけられた。お千代が腕を伸ばしても、匕首の刃は代官に届かない。

代官を睨んだままお千代は足を引いた。その時、背中に当たった温かい壁。焦った時にはお千代の躰は何者かに羽交い絞めにされていた。

腕を捻られ落ちた匕首が畳に突き刺さる。

お千代は首を曲げた後ろにいる顔を見ようとしたりした。

「……なっ!？」

信じられない出来事に、お千代は息を呑んだ。

急に潤んだお千代の瞳に映る男の顔。

「なんで……」

「すまねえお千代」

お千代を羽交い絞めにしたのは弥吉だった。

やはり弥吉は裏切ったのだ。

目の前の真相を追いついで、お千代は弥吉の闇に盲目だった。

今まで湧いたこともないほどの憎悪が、ふつふつとお千代の腹の底から沸き上がる。

「この、この、人でなし! 殺してやる!」

我武者羅にお千代は暴れて弥吉を振り払い、素手で代官に飛び掛った。

鈍く煌いた切っ先がお千代の背を抜けた。

刀はお千代の躰を衝いた。

刃を滴る鮮血が柄に溜まっては畳に墮ちる。

お千代は刃を食いしぼり、自ら前へ進み刀を深く躰に突き刺した。そして、震える両手で細い代官の首を絞めた。

爪を喰い込ませて、力いっぱい絞めた。

なのに代官は下卑た嗤いを浮かべている。

力が入っていないかった。

精一杯の力で憎き相手を殺そうとしているのに、お千代の手には力が入っていないかった。

貧血で手足が痺れ、視界が霞む。

お千代が最期に見たものは、醜悪な代官が近づくその時だった。

そして、お千代の瞼は幕を下ろした。

まだ微かに息があるお千代の柔肌に乱杭歯が突き刺さる。

女の首筋から血を啜る光景は、げに恐ろしく、弥吉は目を放さずにいられなかった。

そのまま弥吉は無言のままに座敷を出て、肩を震わせながらクツクツと唾った。

裏切りの代償は弥吉の精神を蝕んだ。

ふらりふらりと歩く背中、弥吉は幽鬼のような蒼白い顔で、何処行く当てもなく歩き続けた。

弥吉を信じたお千代は死んだ。

憎しみを胸に抱いたまま……死んだ。

偽りの春（十三章）

料亭から宿に戻って来たお蝶は、冷静な顔をしながらも、辺りを世話しなく見回していた。

「昨晚、お蝶たちが助けた娘がいない。」

もとより荷物のなかった娘だ。痕跡が何一つないとと言っても、厠に立っているだけかもしれない。

しかし、胸騒ぎがする。

すぐにお蝶は番頭を呼んで問い詰めた。すると、娘は天狐組が来てかど勾引「カド」かしたというではないか。銭を握らせて置いたというのに、糸も簡単に裏切られたものだ。

「銭を返せとは言わないよ。けどね、あの娘さんになにかあったら、承知しないよ！」

番頭に睨みを利かせ、お蝶は急いで宿を出た。

向かうところは天狐組の他はない。あそこでなければ、他に見当もつかない。

天の字が書かれた戸を開けると、奥座敷で誰かが煙管を吹かしていた。

乱れた着物から覗く艶かしい脚。

肩膝を立てて胡坐を掻いていたのは、お紺だった。

「あんたがここに来て、うちのひとが帰ってこないってことは、みんなやられちまったのかねえ？」

「さて、どこにお逝きなさったのか、あたかも検討つきやせん」

「この期に及んで惚ける気かい？」

「いえいえ、本当にあたかもどこに逝くのか知らないんで」

「あなたの言葉はさっぱりだよ」

「それは申し訳ありやせん」

笑顔でぺこりと軽く頭を下げたお蝶にお紺はほくそえんだ。

「本当に惚けた奴だ。でも、そろそろ本性を見せてくれるんだろう」

「？」

「そちらさんは魅せてくれないんですかい？」

「そうさね、ここじゃあんたもやり辛いだろう。裏庭にでも出ようかね」

紺色の着物を揺らしながら、お紺はすらりと立った。

敵に背を向けて歩き出すお紺。後ろから攻撃をするような、無粋な真似はしない。お蝶と黒子はお紺の後について行った。

裏庭は閑散としていた。

背を向けて歩いていたお紺が振り返った。

「うちの組はあらかた壊滅状態。そろそろ潮時かねえ」

「そんなことありやせんよ。あたいの見たところ、この組はお前さん一人の力で成り立っているように思えやしたが？」

「『かしら』っていうのは『頭』と書くのを知ってるかい？ 実際に躰を使って動くのは『手足』さ」

「つまり自分独りじゃなにもできないと？」

「あはは、なかなか言うじゃないか。試して見るかい？」

「滅相もない」

と、言葉は下手に出ているが、表情は不敵だ。

お蝶の後ろでは黒子が葛籠を下ろして、地べたに正座をしていた。それはこれからはじまることを予兆している。お蝶とお紺の戦いはじまるのだ。

どちらも妖気を纏った魔人。

まだお紺の実力は定かではないが、妖々とした気がお紺の周りを渦巻いている。

しかし、お蝶は掌を返したように肩から力を抜いている。

「ここはひとつ穩便に済ますことはできやせんか？」

「怖気づいたようには見えないけど、どんな魂胆があるんだい？」

「魂胆なんてありやせん。宿から連れ戻された娘を返していただければ、早々に退散いたしやす」

「返すもなにも、あれはうちの商売道具だよ」

もし、あの娘を渡しても、本当にお蝶が引き下がるとは思えない。それに加えて、お紺には晴らしたい仮がある。

「大勢の組の者がどこかに逝っちまったんだ。あんたを生きて帰すわけにはいかないよ」

と、お蝶に言われても、やはりお蝶は惚ける。

「さて、本当に何処にいきやしたんでしょうねえ？」

「もういい加減にしろ！」

ついにお紺が声をあげた。目じりを大きく吊り上げ、本性を見せた。けれど、それもすぐに治まる。

すうと息を吐いてお紺は艶やかに微笑んだ。

「まあいいさ。あんたがなんと言おうと、邪魔者には変わりない。始末するに越したことはないよ」

空は黄昏に染まっていた。妖魔が跋扈する時間が近づきつつあった。戦いには相応しい。

お紺が構えた。

しかし、先に仕掛けたのはお蝶。

振られたお蝶の指先から輝線が翔けた。

ひよいとお紺は横に退いた。

お蝶は腕を振ったままの体勢で動きを止めてしまっている。

「避けなさるとは……視えやしたか？」

「視えたよ。氣を集束させた線だろう？」

「そうでやすか……いえ、あたいには視えないもんで……やはりお前さんは人間じゃありませんね？」

「そういうあんたは？」

「さて？」

お蝶は惚けた。

視えたとなると厄介だ。

お蝶が放った技は氣を練り糸状にしたもの。お紺は線と例えたが、もつと柔軟で撓「シナ」りが利く。罨を張ることもできるが、視える相手には意味を為さない。人間の目にはほぼ不可視の妖系なのだ。

妖系といえど物理法則に左右される代物だ。放たれる速度は術者の身体能力に比例し、手から遠くなればなるほど速さは落ちる。

しかし、お蝶の身体能力は常人を遙かに凌いでいた。

その躰からは想像もできない瞬発力でお蝶は翔け、神速で妖系を放った。人間とは思えぬ速さだ。

だが、お紺は高い下駄で軽く躲す。こちらも人間を越えていた。そして、ついにお紺が反撃に出た。

空気が焦げたかと思うと、火の玉がお紺から撃たれた。

すぐさまお蝶は後ろに飛び退く。

四散した火の粉の痕が地面を焦がした。

やはりとお蝶は頷く。

「狐火ですかい？」

「さて、どうだろうね？」

惚けたのは、今までのお蝶の態度への軽い仕返しだ。

お蝶は視線を左右させ辺りを見回した。広い裏庭といえ、周りは家に囲まれた中庭のような場所だ。ちよいと先には女郎屋の縁側もある。ここでの戦いは多少の幸運といえた。

お紺も馬鹿ではない。火の玉は斜め下に撃たれた。矢鱈滅多ら撃つて、よもや辺りを火の海に沈めるようなことはないだろう。

妖系は視られたが、狐火も自由に放つことはできない。

お紺はお蝶から一定の距離を保って離れていた。減速する妖系は離れれば離れるほど、躲しやすくなることを知っているのだ。一方のお蝶はもう少し近づきたい。けれど、近づき過ぎるのも危険だ。どの程度、お紺が肉弾戦に長けているかによる。

黒子は依然として静かに正座をしている。

切り札の葛籠はどうした？

理由は『色々』とあるが、一番の問題は呑み込んではないモノがあることだ。女郎屋の縁側や民家の窓、言うことを聞かなかった闇が飛び込み可能性がある。

お蝶はお紺との距離を縮め、渾身の氣で妖系を煌かせた。

「しまった」

と、誰かが漏らした。

獣ように四つ足で立ったお紺の上を妖系が抜けた。そのままお紺は後ろ脚で地面を蹴り上げ、肉食獣のようにお蝶の咽喉元に飛びかかった。

自ら背中から倒れたお蝶は真上を通り過ぎるお紺の腹を両足で蹴り上げた。

蹴り飛ばされお紺が滞空している間に、すぐさまお蝶は体勢を整えて立ち上がり翔けた。

地面に四つ足をついて着地したお紺のすぐ横に立つお蝶。

お紺は眼をギラつかせた。

「気安く触るな！」

お蝶に手はお紺の尻から伸びた金色「コンジキ」の尾を握っていた。

その尾を引つ張ろうとしたお蝶の手をなにかが素早く引っぱたき、思わず尾を放して咄嗟の判断でお蝶は退いた。

立ち上がったお紺の後ろから伸びた尾が、頭よりも高い位置まで立っている。それは三本あった。

金色に輝く尻尾を見て、お蝶は感嘆を吐く。

「神々しいまでに輝いておりやすね。尻尾が妖力の源だとか……」

「あたしは三本もある。少しはあたしの恐ろしさがわかったかい？」

「水を差して悪いんですが、確か殺生石に封じられた狐は九尾だとか？」

「……くッ」

嫌そうな顔をしてお紺は齒軋りをした。

お蝶はすまし顔の奥で、目は不敵に笑っている。

「妖狐の実力とやらを魅せてもらいましょう」

「肝を喰らってやる。あたしの恐ろしさを思い知るがいいよ」

真の戦いがはじまる。

果たして決着の行方は？

偽りの春（十四章）

お紺から狐火が三発も放たれた。

どうにかお蝶は躲すも、続けざまに三発の狐火が宙を焦がす。

狐火を放ちながらお紺はお蝶との距離を縮めていた。

鋭く伸びたお紺の爪が妖しく光る。

お蝶は妖系を放った。

妖系を躲しながらお紺は長い爪を振り下ろす。

桜柄の着物に一本の線が奔り破けた。

あと一刹那、お蝶が飛び退くのが遅ければ、線は三本、はたまた五本、胸を抉られていたかもしれない。

危機一髪を乗り越えても、お蝶は汗一つ掻いていない。激しい運動を重ねているにも関わらず、やはり汗は掻いていない。やはり、お蝶は人間ではないのか？

お蝶に攻撃を躲されたお紺はそのまま地を駆け、正座をする黒子に飛び掛っていた。

慌てて黒子は横の地面に飛び込んだ。

地面に肩肘から落ちた黒子は立ち上がるうとしたが、そこへ再びお紺が襲い掛かる。

だが、それはお紺の目の前を抜けた輝線によって防がれた。

「あたいが相手だよ！」
叫ぶお蝶。

その隙に黒子は立ち上がり、乱れた息を整えた。

ひと言も発することなく、影のようにお蝶に寄り添う黒子。生きておるか死んでいるか、それすら怪しい黒子が、深い呼吸をしながら息を整えている。

お紺は黒子を見ながらお蝶に話しかける。

「あんたの連れは、あんたほど俊敏じゃなさそうだねえ」

「相手はあたいだよ、連れに手を出さないで貰おうじゃないか！」

「生憎、正々堂々なんて言葉は持ち合わせてなくてね。黒子はあんなの足手まとい、弁慶の泣き所と言ったところかねえ」

黒子は打ちつけた肘をだらりと地面に垂らし、もう片方の腕は腰でも打ったのか、背に回している。

お蝶は三点を見ていた。黒子、お紺とその近くにある柿渋色の葛籠。問題は葛籠がお紺のすぐ傍にあることだ。

葛籠を見ているお蝶の視線に気付かれた。お紺は葛籠に目をやった。

「この葛籠がどうかしたかい？」

「いえ、ただの商売道具が入っておりやすだけでその言葉を信じず勘ぐるのは当然だろう。」

葛籠に手を掛けようとするお紺をお蝶が止める。

「ちよいとお待ちを！」

「この中になにが隠され……て!？」

葛籠は中から開き、人の膝丈ほどの影が飛び出した。輝線が流れた。

紺が裂かれ朱が噴出す。

腕を斬られたお紺が顔を醜悪に歪ませながら怯んだ。

葛籠の前に立つ小柄な影。

それは袴を身に纏った人形であった。人形は脇差よりも短い刀を抜いている。

人形は糸が切れたように崩れた。すぐにお紺の背後にお蝶が襲い掛かる。

迫った妖糸は金色の尾によって弾かれた。

振り返ったお紺は憤怒していた。

「切り刻んでやる！」

お蝶がお紺の気を引いているうちに、再び人形が動き出しお紺の背後を衝こうとする。だが、二度目はない。人形は尾に弾かれ遠く宙に舞ってしまった。

その隙に黒子は迅速に駆けていた。葛籠に駆け寄り蓋を閉め、す

ぐさま葛籠を背負って間合いを取った。

負傷したと思われるいた黒子の片腕は自在に動き、拾い上げた自らの杖で地になにかを描いていた。

蛇が張ったような文字を円形に描き、自分の周りをぐるりと囲う。もしやと思い、お紺は腕を斬られ血の付いた袖を破り取り、それを黒子に向かって投げつけた。

血の付いた袖は火花を散らしながら、黒子の目の前で燃えた。妖魔を寄せ付けぬ魔法陣を黒子は描いたのだ。

最初に描いたのは簡易処置。さらに黒子は最初に描いた魔法陣の外側に、二重三重と魔法陣を描いていった。

魔法陣を見ているお紺は顔を渋らせている。

「今まであたしが見てきたものとはちよいと違うようだね」
「わかりやすいかい？」

と、にやりとお蝶は笑った。

「遠い異国の術でやす」

「伴天連「バテレン」かい？」

「いえ、欧羅巴「ヨーロッパ」魔術の類でやす」

術を講じた黒子に代わってお蝶が説明をした。謎の葛籠に西洋魔術。黒子の謎は深まるばかりである。

お蝶とお紺が対峙する。

再び戦いが始まり、熾烈を極めるかと思われた。

しかし、事態は思わぬ方向に進みつつあった。

どこかで悲鳴が聴こえ、耳を済ませれば喚き声も聴こえる。

女郎屋の窓や縁側から急に煙が出た。立ち昇る灰色の煙が、休むことなく女郎屋から出ているではないか。

縁側から駆け出してくる者も数人いた。その中に混ざり、幽鬼の形相でゆらりゆらりと歩く男の姿。男は肩を震わせクツクツと嗤っていた。

弥吉だった。

胸を紅く滲ませ、弥吉は空ろな眼で歩いていた。

「クククツ……燃えちまえ、全て燃えちまえ！」

そう、弥吉が油を撒き女郎屋に火を放ったのだ。

木造立ての女郎屋は見る見るうちに燃え上がっていく。

弥吉は最後にお紺をも裏切ったのだ。

お紺は憤怒した。

「人間てのは本当に醜い生き物だねッ！」

狐火が放たれ火のついた弥吉は両手を高く掲げ広げた。

地獄の業火に焼かれながら、弥吉は奇声にも似た高笑いを発していた。

裏切りを繰り返した弥吉は炎によって裁かれた。

火は密集した家々にすぐに飛び火するだろう。

「本当に潮時のようだね」

と、お紺は呟き、狐火を放った。

もう手加減をする必要はない。ここは火の海に沈む。

お紺はところ構わず狐火を放ち、あたりはまさに火の海に沈んだ。

建物に囲まれた裏庭は、このままでは火の壁に囲まれることになるだろう。

炎を後ろにしてお紺は艶やかに微笑んだ。

「尻尾を巻いて逃げさせてもらおうかね」

金色の尻尾を揺らし、燃え盛る女郎屋に消えていくお紺の影。

その後を追ってお蝶は火の中に飛び込もうとしたが、屋根が崩れ落ち行く手を塞いでしまった。

気付けば女郎屋以外の建物も燃え盛っている。

熱風が吹いた。

「さて、どうしたもんか……」

お蝶は辺りを見回しながら呟いた。

目が留まった。

お蝶も黒子も二階の屋根を見上げていた。

煌きが屋根に向かって放たれる。

不可視の妖系を屋根に固定し、葛籠を背負った黒子を、さらにお

蝶が黒子を背負う。

「屋根が崩れないことを祈るのみだね」

そして、お蝶は軽やかな動きで屋根に登りはじめた。

偽りの春（十五章）

夜更け、代官は寢室の襖を開けた。

すると敷かれた布団の横に、背を向けて座る女の姿があるではないか？

「何者じゃ？」

尋ねた代官に女は背を向けたまま答える。

「わたしのことをお忘れてございますか？」

ゆらりと立ち上がり、女は勢いをつけて振り向いた、その顔は般若の面。二本の角を生やし、恐ろしいまでに憤怒した般若面であった。

代官は一瞬怯みながらも、威勢をつけて女に飛び掛った。

「誰の悪戯じゃ！」

驚掴みにした代官の手が般若面を剥ぎ取る。

その下から現れた顔を見て代官はカッ開いた眼を剥いた。

数日も前に抱いた女ならば忘れていたかもしれない。けれど、この顔は忘れるはずもない。

お千代だった。

そんな筈はない。確かに血を啜り、事切れた筈だ。

「儂が殺した筈……いや、絶対に殺した」

「では、ここにいるわたしは何者でございましょう？」

「幻影に決まっております」

「なぜそう思うのですか？」

「桜の木の下に殺して埋めた！」

躰の血を全て吸われ、お千代は暗い地面の底に葬られたのだ。

お千代は嗤った。

嗤いを木霊させながら、代官の手から般若面を奪い取り、部屋の外へと走り出した。

後を追う代官は刀を取り、襖を開け、障子を開け、縁側に出た。

お千代は何処へ消えた？

女の嗟い声が静かな空気に木霊した。

月明かりを浴びて庭に佇む女の影。

「わたしを殺した怨み。そして、殺されていった女たちの怨み。篤

「トク」と味わうがいい」

「やれるものなら、やってみる」

代官は下卑た嗟いを浮かべ、すぐに人を呼んだ。

「皆の者、曲者じゃ、出合え出合えい！」

大声に数人の武士が慌てて現れた。そして、仲間が仲間を呼び、次々と武士が沸いて出る。

堂々と庭先に立つ女が般若面に手を掛けた。

「魅せやす、殺りやす、咲かせやす。この世には、悪の蔓延る処なし。今宵も華を咲かせましょう」

般若面は宙「ソラ」高く投げられた。

そこにお千代はいなかった。いたのは桜柄の着物を着たお蝶。

「夜桜お蝶、毒を持って毒を制しに参上いたしやした」

正体を現したお蝶に武士たちは一斉に抜刀した。

「曲者じゃ、斬り捨てい！」

代官の命令で武士たちが次々とお蝶に襲い来る。自ら死に飛び込むようなものだ。お蝶は艶笑する。

悪の蔓延る処なしと言いながらも、毒を毒で制すという。

お蝶の浮かべた笑みは魔性だった。

闇の中で細い細い輝線が宙を翔ける。

呻き声があがったのが早いのか、それとも勿ねられたのが早いのか。生首が次々と宙を舞った。

黒土に鮮血が染み入る。

流された女郎たちの血に比べれば、穢れ、対価にもならない。復讐を晴らすには、まだ血が足りない。なによりも、代官が血に沈まなければ、女たちは浮かばれぬ。

お蝶の技が冴える。

呻き声や悶え声が闇の中で次々と木霊する。
武士たちは怯んだ。

見えぬお蝶の攻撃に恐れ慄「オノノ」いた。
逃げ惑う武士も現れた。

しかし、お蝶が逃がすわけもない。

背を向けて逃げた武士は八つ裂きにされた。

容赦ないお蝶の攻撃は続き、黒土は血で泥濘をつくり、地獄の沼を形成した。

美貌を湛え、艶やかに笑いながら人を斬るお蝶は、まさに羅刹女そのものだった。人である武士たちが敵う相手ではない。武士たちは生きて地獄を見た。

やがて立つ者は二人を残していなくなった。

地面では虫の息をした武士たちが苦しそうに呻いている。

「お代官様、残っていらつしやるのは貴方様だけでございやすよ」
挑発するお蝶に代官は笑った。

「虫けらどもを倒したくらいで粹がるな。お前の相手など儂独りで十分じゃ」

地獄絵図を目の前にしながら、代官は臆することなく抜刀した。
さすがは人の血を啜る怪物だけのことはある。

今の二人の距離ならば、刀よりも妖系の方が有利か？

枯れ細った躰からは想像もできぬ瞬発力で、代官が縁側から大きく飛翔した。

すかさずお蝶が妖系を放つ。

刀と妖系が交じり合い、宙で火花が散った。

弾かれたのは妖系。

切断された妖系が氣を失い消滅する。

お蝶は頭上に振り下ろされる刀を飛び退いて避け、続いて来た衝きを横に退いて躲した。だが、それを予期していたかのごとく、刀は薙ぎ払われお蝶の前を掠めた。

三段攻撃を仕掛けた代官は息も切らせていない。枯れた躰は偽り

としか思えない。老人の皮を被ったなにかなのだ。
乱れ繰り出される刀の舞を、お蝶はひらりひらりと、こちらも舞うように躲す。

血でぬかるんだ地面に代官が足を取られた。

見過ごすわけもなくお蝶は妖糸を放つも、それはいともあっさり
と断ち切られてしまった。

「やはり糸が見えやすか？」

「面白い技を使う手足」「テダ」れじゃな。しかし、儂には勝てぬ！
疾風のように刀が薙いだ。

ひよいとお蝶は躲したが紙一重。刹那違えば真つ二つに胴を斬ら
れていただろう。その証拠に、腹の着物が少し口を開いていた。

飛び跳ねながら刀を躲すお蝶を代官は嘲笑う。

「兎のように飛び跳ねおつて、逃げることしかできないのか？」

「物事には機というものがございやす。例えば今とか」

会話に挿んで妖糸を放つも、呆気なく斬られてしまった。

「汚い真似をしおる」

「外道には外道。殺し合いは是が非でも勝たねばなりやせん。負け
は死を意味しやすから」

「ならばお主に待つておるのは死じゃ」

「さて、それはどうでございましょうか……」

お蝶は網を引いた。

ぬかるんだ地面に隠されていた網状の妖糸を一気に上げたのだ。

罨に掛りそうになった代官の刀が冴える。

高く飛翔した代官は下から襲い来る網を切り裂いた。

しかし、不意を衝かれた為か斬り損じた。

刀を握っていなかった腕が、肘から撥「ハネ」ねられた。

ぼとりと墮ちた腕は斬られてもなお動いている。

「おのれえッ！」

刀を捨てて血が吹き出す肘を押さえる代官の顔は、恐ろしく醜悪
に歪んでいる。

代官がお蝶に背を向けて駆けた。

逃げる気かと思いきや、代官は不可思議な行動に出た。

なんと凍えるような池の水に自ら飛び込んだのだ。

水飛沫を上げた池は波紋を立ててやがて静かになった。

代官は上がってこない。

まさか池に秘密の抜け道があるとでもいうのか、お蝶は池に目を見張っていた。

その時だった。

火山が噴火したごとく水飛沫が上がり、お蝶の身長は二倍はあるうかと思われる巨大な影が飛び出したのだ。

月光を浴びて煌く水飛沫の中に、その怪物はいた。

暗がりではよくわからぬが、筋骨隆々の躰は水草のように緑色をしており、手足の指の間には水掻きが付いている。そして、その怪物の象徴とも言える皿が頭に乗っていた。

巨大な河童だ。

片腕のない河童がキラリと眼を輝かせ、眼下のお蝶を睨みつけていた。

「正体を現しやしたね」

物怖じしないでお蝶は河童を見上げていた。

「儂の正体を見たからには決して生かして帰さぬぞ」

「あたいもお前さんを生かしちゃ置きやせんぜ。お前さんに殺された女の怨み辛み、きつと極上の味がしやすぜ。残さず召し上がるといいよッ！」

速い。

お蝶の動きは疾風のように速かった。

繰り出される妖系の雨。

負けじと河童は鋭い鉤爪で妖系を切り裂き、巨体を動かしお蝶に襲い掛かる。

押し掛かるように迫る河童をお蝶は嘲笑った。

「まったくお前さんという野郎は、頭が弱いんじゃないかね」

「なんだと？」

「魅せやしよう、傀儡士の奥義召喚術。篤とご覧あれ！」

河童が立つてた地面が不気味な輝きを放った。その光は地に描かれた魔法陣であった。いつの間にか、またしても地面に罫が仕掛けてあったのだ。

地の底から身も凍る、巨獣にも似た それ の咆哮が聴こえた。

河童は動くことができなかった。自分の真下に何かがいるとわかっていながらも、恐怖で身がすくんで足が動かない。

それ の恐怖は大地にも伝わったのか、黒土が生き物のように蠢いていた。

否、まさにそれは生き物だった。

それ の咆哮は大地を腐らせ、この世に大量の蛭を呼び出した。何千何万という闇色の蛭は、動けぬ河童の躰を覆い、血を貪るように啜った。

「ぎゃああ……な、なんだこれは……ぐげげえ……」

「あちら側に棲む蟲の一種でやすよ。闇蛭と申しまして妖物の血が大好物でやす」

闇蛭は河童の躰を這い回り、肘の傷から体内へと潜り込んだ。皮の下を波打って這い回る闇蛭に耐えかね、河童は巨体を振り回し暴れ狂った。そのたびに、地面が激しく揺れ、闇蛭の海が躍る。

「てめえに殺された女の怨み、味わったかい！」

お蝶の怒号もすでに河童の耳には届かない。

耳の穴から侵入した闇蛭に鼓膜を破られ、超絶的な苦痛に悶えるばかり。

鼻で嗤ったお蝶は口元を吊り上げた。

これで悪代官も一巻の終わりだ。

あとは残骸が腐る前に大掃除をするだけだった。

物陰に隠れていた黒子がひよいと顔を出し、地面に下ろした葛籠の蓋を開けた。

そして、お蝶は甘く囁く。

「おゆきなさい」

葛籠に潜む闇から、甲高い悲鳴が聴こえる。号泣する声が聴こえる。轟々と呻く声が聴こえる。どれも惨苦に満ち溢れている。

風となつて 闇 は世界を翔け抜けた。

散らばつた肉を呑み込み、血を呑み込み、貪欲に貪り喰う。

闇 は河童の躰にも絡みついた。

もはや河童に抵抗する力など残っていないかに思えた。

しかし、河童は最期の力を振り絞つて、艶やかに笑い続けているお蝶に一矢報いようと手を伸ばした。

手を握られたお蝶は余裕で構えている。

「そんな物でいいなら、冥土土産にくれてやるよ」

お蝶の腕はもぎ取られた。けれど、血が噴き出すこともなく、なおもお蝶は嗤っていた。

憎しみを抱いた絶叫が木霊した。

河童の躰は全て 闇 に呑み込まれ、全ては何事もなかったように消えた。

「さっ、自分の世界にお帰り」

闇 は泣きながら葛籠の中に還っていった。

そして、黒子は葛籠の蓋を固く閉じた。

偽りの春（終章）

天狐組と女郎屋は全焼した。

そして、組は大勢の組員の失踪と、二本の大きな柱を失ったこともあり、解体を余儀なくされた。

いつか嵐の晩に助けた娘とお蝶は再会していた。

「お前さんも達者だね」

人並みの笑みでお蝶は娘を見送った。

「ありがとうございます。いつか旅の途中、私の村に立ち寄ったら歓迎します」

「それは嬉しいこったね」

「はい、それでは失礼します」

娘は頭を下げてから、眩しい笑顔でお蝶に手を振った。女郎の時とはまるで別人のような顔だ。歳相応な若々しさに溢れた娘がそこにはいた。

これから女郎たちは国元に帰る者もいれば、帰れぬ者もいる。温かく迎えてくれる家がある者もいれば、またある者は次の勤め先を探し旅に出る。

お蝶もこれからまた長い旅が始まる。

その前に、お蝶は黒子を引き連れ代官屋敷に足を運んだ。

人っ子一人いない代官屋敷は、不気味なまでに静まり返っていた。

太い幹をした木の根元で、お蝶と黒子は地面を掘り返した。

しばらく掘ったみたとところで、人の織手が出た。

丁寧に土を退かしていくと、血の気もなく蒼ざめた顔が現れた。

暗い地の底で眠っていたのはお千代の屍体だった。

さらに掘り進めていくと、骨や半分腐ったような屍体が山のように出てきた。

代官の餌食となった娘たちの屍体が、ここに埋められていたのだ。まだ人の形をしている屍体はお千代以外にもあったが、それらは

臓腑を抉られた痕がある。その痕がお千代だけになかった。

代官が生き血を啜り、お紺が肝を喰らっていたことまで、お蝶は知る由「ヨシ」もなかった。

最後の犠牲者になったお千代は、その場にお紺がいなかったために、肝を喰われていないのだ。

血を抜かれ、肝まで抜かれるとは、なんとおぞましい死であろうか。

お蝶と黒子は屍体に手を合わせて祈った。

そして、お蝶はお千代が髪に差していた簪「カンザシ」を取り、懐にしまつて形見とした。

しゃがんでいたお蝶が立ち上がった。そのまま上を見ると、人の血肉を養分にした桜が咲いていた。

美しく儂くも咲き誇る桜。

もうすぐ冬が訪れるというのに、今日も昨日に続いて日差しの強い日になりそうだった。

この町から嵐は去ったのだ。

偽りの春（完）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0081e/>

夜桜お蝶～艶劇乱舞

2009年3月24日08時46分発行